

哲 學 研 究

第 二 十 三 卷 第 八 册

第 二 百 六 十 九 號

昭 和 三 十 年 八 月 一 日 發 行



(大正五年四月六日第三種郵便物認可) 昭利 三年七月二十五日印刷納本(每月一回一日發行)

概 念 と 自 由

..... 文 學 士 平 下 欣 一

批 評 の 藝 術 史 的 意 味 (承 前)

..... 文 學 士 井 島 勉

有 無 の 關 係 に 就 いて

..... 工 學 博 士 上 田 大 助

京 都 帝 國 大 學 文 學 部 內 部

京 都 哲 學 會

京都哲學會規則

第一條 本會ヲ京都哲學會ト稱ス

第二條 本會ハ廣義ニ於ケル哲學ノ研究及其普及ヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ

一、毎月一回研究会ヲ開ク

一、毎年公開講演會ヲ開ク

一、毎月一回哲學研究ヲ發行ス

第四條 本會事務所ヲ京都帝國大學文學部内ニ置ク

第五條 本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク

一、委員(若干名)京都帝國大學文學部哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ

一、書記(一名)委員會ニ於テ囑託ス

第六條 本會ノ趣旨ニ賛同スル者ハ何人ニテモ會員タルコトヲ得
學校、圖書館、教育會、其他ノ團體ハ其團體ノ名ヲ以テ入會ス
ルコトヲ得

第七條 會員ハ會費トシテ年五圓、前後二期ニ分チテ前納スベキ
モノトス

第八條 會員ハ本會ノ諸種ノ會合ニ出席スルコトヲ得、且ツ雜誌
『哲學研究』ノ配付ヲ受ク

第九條 本會規則ノ改正變更ハ委員會ノ決議ニ依ル

京都哲學會役員

委員

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	
天野	白井	上野	植田	小島	高山	木村	九鬼	田邊	西谷	野上	羽溪	服部	久松	本田	山内
貞祐	二尚	照夫	壽藏	祐馬	岩男	素衛	周造	元治	啓治	俊夫	了諦	英次郎	眞一郎	義英	得立

前 號 目 次

相對性理論をめぐる認識論的諸問題(承前)……………文學士 近藤洋逸	批評の藝術史的意味……………文學士 井島勉	行爲と論理(承前)……………文學士 島芳夫
-----------------------------------	-----------------------	-----------------------

告 會

一、本會へ入會希望者へ京都市西洞院七條南内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ規定ノ會費(前表紙裏ニアリ)御納付ノ上御申込被下度候
 一、會員ニテ轉居入退會等(編輯事務以外ノ一切)ノ事務ハ内外出版印刷株式會社内京都哲學會へ御通知被下度候
 一、會費ハ振替口座大阪三〇六六三番 内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ御拂込被下度候
 一、前金切レノ場合ハ帶封ニ「前金切」ノ印章捺捺致スベキ
 一、ニ付直ニ御拂込下サレ度候
 一、本誌ノ編輯ニ關スル通信及紹介・新刊書・寄贈雜誌等ハ凡テ本會宛テニ御發送被下度候

京都帝國大學
文學部内
京都哲學會

註 文 規 定

◆ 會員にあらざる購讀者の御註文及び廣告に關する件は内外出版印刷株式會社へ御申込下され度候
 ◆ 本誌の御註文はすべて代金郵稅共前金にて御送り下され度候
 ◆ 振替貯金にて御送金の際は(振替京都三九三一番大阪三九三一番東京三九三一番) 内外出版印刷株式會社宛に願上候
 ◆ 特に請求書及領收書等を要する場合は郵券參錢御送付下され度候

定 價

冊	冊	冊	冊	冊	冊
一	一	一	一	一	一
冊	冊	冊	冊	冊	冊
金四拾五錢	金貳圓七拾錢	金壹錢五厘	金貳圓七拾錢	金壹錢五厘	金貳圓七拾錢
不	不	不	不	不	不
中	中	中	中	中	中
受	受	受	受	受	受

廣告料

一頁 金參拾圓 半頁ハ取扱不中

昭和十三年七月廿五日印刷納本
昭和十三年八月一日發行
行 第二百六十九號 第二十三卷 第八册

京都帝國大學文學部内

不許複製
禁轉載

編輯者 京都哲學會
右代表者 服部英次郎
發行者 須磨勤兵衛
印刷者 須磨勤兵衛
印刷所 内外出版印刷株式會社
京都市北小路通新町西入
京都市西洞院通七條南入

發行所

京都市下京區西洞院七條南

内外出版印刷株式會社
京都三九三一番
大阪三九三一番
東京三九三一番

本社 京都市下京區西洞院通七條南入
内外出版印刷株式會社

賣捌所

(東京) 寶文館 東海堂
 (大阪) 寶文館 東文堂
 (神戸) 寶文館 盛文館
 (京都) 寶文館 川瀬書店

シラー 美的教育論

安倍能成 高橋健二 譯

菊判上製四一六頁
定價三・〇〇 送料・三三

新刊

哲學古典叢書 美學論集下 ゲーテと並び稱せられる偉大な詩人であると同時に、カント哲學の繼承者と目せられたシラーの美學論文が、藝術的獨創と哲學的思索を兼ね備へてゐるのは偶然ではない。シラーに於いてほど、「美しき魂」と學者とが幸福な結合をとげてゐることは稀有である。詩人哲人たる彼にして始めて直觀の體系化が可能だったのである。そこにシラーの美學論文のつきせぬ魅力がひそんでゐる。特に、美と藝術とが人間性の完成にとつて、ひいては理想的國家社會の建設にとつて、如何に重要な役割を持つかを明らかにした「美的教育書翰」は、常に人類の文化の行手を照らす不滅の炬火である。これと並んでシラーの二大論文の一なる「素朴文學と情感文學について」は、古代文學と近代文學の差異の本質を摘出し、素朴的情感的といふ藝術上文化史上の基礎概念を得、それによつて情感的な近代文學の特質と使命と位置とを明らかにした眞に劃期的著作であつて、古今東西の文學論中最も精彩と獨創に富むものといへる。

(大正五年四月六日)昭和十三年七月二十五日印刷納本(毎月一回)
第三種郵便物認可(昭和十三年八月一日發行)

哲學研究 第二百六十九號 定價金四拾五錢

郵税金壹錢五厘

東京 神田 岩波書店 振替 東京 〇四二六二